Book Review

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055570

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

新刊紹介

○ 銭谷武平：**大峯こぼれ話**　四六判変型，198頁．1997年5月21日，東方出版．2,000円．

長崎大学名誉教授の著者は退官後，郷里の洞川，そして大峯（峰）山の自然誌の調査を使命感に燃えて続けておられることがあとがきなどからひしひしと伝わってくる。この本では食生活，名花名木，秘歌と古名伝承，奥駈け修行などを扱っており，名花名木の部では，名花オオヤマレンゲ；幻の花クロユリ；石楠花ノート；大峯山系の白樺木の章が著されている。　（植田邦彦）

○ 鈴木三男・田川裕美（訳）：**植物解剖学入門ー植物体の構造とその形成ー**　A5判，197頁．1997年4月5日，八坂書房．2,600円．

本書はPaula Rudall著Anatomy of Flowering Plants-An introduction to structure and development-2nd ed.（1992）の翻訳である。言うまでもなく，植物解剖学は比較形態学，器官学，発生学などとともに植物自然史科学の基礎となる重要な分野であり，精通すべき学問体系である。残念ながら近年はこれらの分野の日本語のよい本があまり出版されておらず，特に解剖学レベルの本はない。このような状況の中での本書の出版は非常に嬉しい。まさに真に入門書としてよく書かれており，用語集もたいへん充実している。初学者が，植物とはどのような体制の生き物なのかを学ぶには最適な書といっても決して過言ではなかろう。また，遺伝子レベルでの形態形成に関わる研究者などが参考にするにも好適であるし，自然史分野の研究者が講義の教科書として使用したり，自らの知識の整理を行うのにも適当な本である。訳もさすがに解剖学を専攻されている訳者によるものだけあって，丁寧で的確であり，安心して読み進めることが出来る。必読の書としてお薦めしたい。ただ一点指摘しておきたい。前巻の新刊紹介でも指摘したことだが，本書でも，またしてもFlowering plantsを「顕花植物」と訳している。なにゆえに近年このような理解しがたい用い方が流行しているのか，謎である。顕花植物はあくまでも隠花植物と対語であり，Phanerogamに対して使われ続けてきた訳語である。それを被子植物に限って使うのは混乱を招くだけであって，百害あって一利なし，である。この不可解な傾向が一刻も早く消滅することを心から希求する。　（植田邦彦）

○ Takashi Yamazaki：**A Revision of the Genus *Rhododendron* in Japan, Taiwan, Korea and Sakhalin**　A4判，v + 179頁。1996, Tsumura Laboratory. 5,000円（送料380円）．

Flora of Japan（講談社）の編集者の一人である山崎敬博士が，日本の野生植物木本II（1989，平凡社）およびFlora of Japan IIIa（1993）のツツジ科の執筆に続き，このたび上記極東地域のツツジ属をまとめてrevisionを発表された。この本の構成は，カラー写真（2頁），分類体系の紹介をかねた種・亜種・変種のリスト（5頁），検索表と各分類群の記述（144頁），自然および人工雑種のリスト（4頁），34種の基準標本のリストおよび写真（19頁），その他となっており，扱われた種は67，新分類群は節7，亜種1，変種8，品種3，雑種1である。日本産の分類群の概念は基本的には前著とおなじであるが，ほとんどすべての種の分布図が記載されていること（マルバサツキ・ヤマツツジ・シュジョウツツジはない），種・亜種・変種ごとに十分な標本の引用がなされているので，本属の理解を一層助けてくれる。前書きによれば，ミツバツツジを含む*Brachycalyx*節の取り扱いについては生品の綿密な観察をおこなった結果であることが述べられており，1989年著にみられた本節の名は後2著では消えて*Sciadorhodion*節として扱われている。本著の対象域は極東地域の大部分を含むにも関わらず，たとえば長野県植物誌のような地方誌にも十分に有益な情報をもたらしてくれるのは大変ありがたい。ツツジ属の研究者には欠かせない重要な文献である。難をいえば，写真4（毛）や写真5, 6（種子）など鮮明さが不足し細部の表現が十分でない点であろうか。入手先は津村研究所植物研究雑誌係（300-11 茨城県稲敷郡阿見町吉原）である。　（清水建美）

○ 岡村はた：**錦葉紫金牛図説**　B4判，56頁．1997年1月，自費出版．頒価不明（連絡先：神戸市東灘区住吉5-1-803）．

竹笹の研究で知られた富士竹類植物園副園長の岡村さんが，ヤブコウジ園芸品種図説（本書の別名）を自費出版された。著者は一方では30年以上も植物の斑入りの発生・遺伝・形態の研究を続けておられ，ヤブコウジは枝変わりが出やすくて品種が多く，短期間に多くの枝変わりが見られるので斑入りの研究には面白い材料だという。この本には著者自らが栽培した66品種を含め，実に232品種の解説が盛られている。ヤブコウジ決定版である。ヤブコウジに斑入りがあるぐらいの知識しかなかった私には驚きの本でもあった。巻頭11頁にわたる56品種の彩色画は植物画家小西美恵子氏の筆によるものである。　（清水建美）

○ 金栄健介：**絵で見る　知られざる白山**　A5変形判，120頁．1997年6月20日，中日新聞北陸本社．1,800円．

華麗でハンデイな新しい白山の一般向き総合案内書が，ボタニカルアーチストの金栄健介さんによって出版された。書名に'絵で見る'とあるように，この本は，今はやりの写真ビジュアルではなく，収められた地形図も植物図も伝承図もすべて著者の創作による水彩画（大判59枚＋カット多数）であることが何よりの特徴である。著者は昭和63年50歳の時から登山を始め，今日まで10年間に四季をとおして白山には50回以上，中部諸山岳には200回以上も登り，丹念に観察を繰り返し，資料を収集されて創作に努められた。

この本の構成は，右開き縦書き，1トピック見開き方式で，トピック毎に左頁は絵，右頁は解説として，地形・地質・高山植物・動物・伝説・絵画講座と多岐にわたって豊富な興味深い記事を収めている。高山植物に関していえばクロユリやハクサンコザクラなど金沢大学が最近行った遺伝子レベルの研究成果も紹介するなど，内容は斬新である。高山植物の開花後のお花畑も取り上げられ，そこでは「図鑑に載っている高山植物の果実はナナカマドなどその果実がよく知られている種に限られ，他は自分で確かめるしかない」と鋭い指摘も忘れていない。全くその通りで残念なことに自然史の情報はまだまだ不足しているのである。

これから白山に登る方には初心者向きのガイドブックとして，ベテランの方には白山の魅力を見直すよすがとして，すべての白山を愛する方々にお勧めしたい本である。入手方法は直接中日新聞北陸本社（TEL　076－233－4632販売直通）に申し込むか，郵便振替口座（口座番号　00710－5－40756　金栄健介）あて，本代1800円＋消費税90円＋送料310円を送金すればよい。（清水建美）

○ 奥田重俊（編著）：**生育環境別　日本野生植物館**　B5変形判，631頁．平成9年7月10日，小学館．9,765円．

群落学を専門とされる編著者が24名の共著者を得て生態図鑑と分類図鑑の内容を併せ持つ新しいスタイルのカラー植物図鑑を出版された。英文書名はWild Plants of Japanである。

この本は，はじめに「植物ガイド」として「日本の地形と気候」「世界と日本の植物区系」「日本の植物分布と森林」「日本の植物を生態的に見る」の植物地理学及び生態学的入門の記事があり，続いて「人里の植物」から「高山の植物」まで11の生育環境別の章立てがなされ，それぞれにカラー写真を掲載しながら具体的に植生と植相の解説をするという構成になっている。各章では，たとえば「人里の植物」では，まず岡山県を取り上げて具体的に人里植物が何であるかを紹介し，その後で人里植物の種類を図鑑風に解説するという工夫がなされており，従来の図鑑とは異なって読者には入り易いし大変理解し易い。種類の解説も生活史や生活型に力点が置かれ，分類学者が著す図鑑ではない特徴が随所に見られる。17名の共著者が提供した17個のコラム記事も楽しい。野生植物館という書名もなるほどと納得できる。フイールドで植物を観察し，調査研究されるすべての方々にお勧めしたい。（清水建美）

○ 大橋広好（訳）：**国際植物命名規約（東京規約）1994**　菊判，247頁．1997年2月20日，津村研究所．2,500円．

Internaitonal Code of Botanical Nomenclature (Tokyo Code), adopted by the fifteenth International Botanical Congress, Yokohama, August-September 1993の正式な日本語訳版である。前版のベルリン規約同様に，大橋広好博士による極めて厳密に考察された訳本で，全面的な信頼がおけるものである。ただ残念なことに付録などは省かれているので，英語の原版にあたる必要があり，本訳書だけではすべてにことたれりとは言えない。一方，詳細な命名法用語集が付け加えられ，類書がないだけに非常に嬉しいものである。唯一問題があるとすれば，命名規約関係の日本語訳にはまだ一般に浸透していないものや大橋博士独自のものなどがあり，英文論文などを読んでその語の使われ方や規約での取り扱いを知ろうとした場合には，索引からではうまく本書を使えない場合もあることである。

本規約は，ベルリン規約から極めて大幅に変更されている。何と言っても学名の安定使用のために，プライオリティーに対する制限が飛躍的に強くなり，種名についても「経済的に重要な種」という制限が廃されたことである。この種名についての保留や廃棄については長期の論争があり，かつ，「経済的に重要な種」についてですら少し前の会議では議論沸騰の末僅差で採択されたことを思えば，感慨深いものがある。ただし，序文などにも告白されているところであるが，実際は命名法部会では十分な賛成を得られず，本会議最終日の総会で（したがって命名規約の専門家の比率が圧倒的に少ない場で）の決議文による執行部の独自判断による強行

突破の感が無いとはいえない。ただ，これまでも反対論の一部で言われてきたことであるが，「一般に広く」使われているという判断が必ずしも公平とは言えない状況が起こり得る心配は常にある。日本の自生植物の学名が日本では安定して使用されているにも関わらずに変更を強いられる可能性もあるからである。

化石の記載は現生種と異なり言語に制限がなかったが，ラテン語か英語に制限されたことも大きな変更であろう（現生種についての記載を英語にする，もしくは制約の撤廃などは提案されたが支持されなかった）。門には動物と異なり division（divisio）が用いられてきたが，動物と同じ phylum も使用してよいことになった。また，これまで規約が削除されたものは欠番になっていたが，詰めて埋められているので，規約番号を古いものから参照するととんでもない誤解を招くことになる。

このように，まったく新しい規約とすら言ってよいほどであり，従来の命名規約に通じておられる方も一から熟読する必要がある。植物自然史学の最も根幹をなす命名の問題であり，また，学名の安定という古くて新しい問題への命名関係者の最新の答えが結集された新規約であり，必読の本である。

ただ，非常に奇妙なのは，上記の原著名（フルの和訳名も本には載っている）にもみられるように，本規約は93年にアジアではじめての国際植物科学会議が横浜で開かれた際に決定されたものに基づいている。そしてその会議は命名のセクションだけでなく，本会議も横浜で行われた。一般にこれが東京規約とか東京会議と呼ばれるのはどういうわけであろうか。評者には理解の出来ないことである。

出版は植物研究雑誌の出版元で知られる津村研究所が前版に引き続き担当されたので安価に提供されているのは嬉しいが，反面，前版同様に通常の書店では見かけないし，広告なども一般新聞などではされていないようである。農学関係者など幅広く熟読していただきたい基本図書だけに，少し残念ではある。購読されたい方は〒300-11　茨城県稲敷郡阿見町吉原3586　津村研究所（郵便振替口座　東京8－1680（なぜか旧形式で記載されている））に申し込まれたい。

（植田邦彦）